

刷毛の語源

刷毛はものを塗る必要が生じたとき、自然発生的に作られたものと考えられるが、古い時代これを何んと呼んで居つたかの確証はない。漆塗りが始められたのが二千三百年も前の事でありそれ以前にも、柿渋やベニガラ、丹などが塗料として使われて居つたので、これにも刷毛は使われていたと思われるが、まだ筆や紙が、わが国に伝わる以前の事であるので確たる文献がないのも当然の事であろう。

応神天皇の代に秦の始皇帝の後裔^{ゆずりのみま}弓月君は百濟より百二十七県の人民をひきつれて日本に帰化した。これが秦氏であつて、雄略天皇の代に、これらの諸国に散在して居る秦氏を召集めたところ、その数は実に一万八千六百七十人にのぼり、その後も移民する漢族系の帰化人はその数を増した。これらの移民によつてさまざまなものもたらされたが、刷毛に關係あるもの多くは直接或は間接に中国から移入されたのである。しかし、中国にも刷毛という文字は見当らぬといわれるので、日本の刷毛はおそらくは

刮毛（クワツモウ・和訓ハタ毛・けずった毛の意）

の和転化されたものが呼名となつたものであらうと云う説がある。また古くは

（いたづりにて漆を塗る）

とある、との説もあるので、この説から考へると漆刷毛を古くは

（板^{いた}刷^{ずり}）

と呼んでいたのではないかとも思われる、現在の漆刷毛にしてもその形の上から刷毛というより板刷^{いたずり}と呼んだ方が当てはまつている様にも思われ、のちに「はけ」と呼ばれ、これに（刷）の文字が使われているのも古い呼名の（板刷）に基因するのではないかと推定もされるのである。現在も同じ作りかたで（ドウズリ）と呼ばれてい

るものがある。

刷毛の呼名としての日本最初の記録と思われるのは

(和妙類聚抄) ……源順著、醍醐天皇「延長年間一〇二五年—一〇三二年前、西曆九二三年」に

膠漆具(鬚筆)・波介なげ・以漆塗物也

とありまた同抄に

鞍馬具(馬刷)千麻波太氣

とあり、漆を塗るためキビの毛を使用したことがみえており、更に麻の毛も使つて居つた事が知られるが、これはヨーロッパにおいて、始めブラシに植物纖維のみが使われていたとあるのと共通の点がみられるのである。

江戸時代の文献としては

(雍州府志) ……貞享三年黒川道祐著「二百六十九年前、西曆一六八四年」に

糊刷こまづり以板挿鹿毛いたさししかげ

とあつて古くは糊刷毛に鹿毛を用いておつた事が知られる。

この

糊刷こまづり

とあるのは、前記の板刷いたさしとは共通のように解釈する事が出来、刷毛の文字の出現には、大いにしかも深い関係があつたものと考えられる。

和漢三方図会（正徳年間、二百四十年〜二百四十四年前、西曆一七一一年・寺島良安編）

には

鬃筆・刷毛・和名・波介・以漆塗物也

俗為刷毛と

蓋刷の音拭也

以飯糊繼紙等用之……

とあり、ここにはじめて刷毛の文字がみえているのである。

しかし

刷毛とは刮毛を略したものか

とあるところからみれば古くは刮毛（はたけ）と書かれておつたものと思われ、また

刷毛とは稗心（ワラミゴなどで作り物の塵・泥を払拭し……

ともあるところからみれば、昔も刷毛と共に今の服ブラシの様式のものがあつたであろうことが知られる。

古くは和紙の製造に稗心（ワラシゴ）製の刷毛状の器を用い、これが獣毛製の撫刷毛に変わり、また、サイガキ（佐伊加木）纏刷（染物欄参照）は、これも稗心（ワラシゴ）を用いられておつたものが、現在のように織物に糊を施すのに獣毛に限られるようになった。

刷毛の中で（刷）の字を用いて最も適当と思われるのは、

神社の御札・錦絵其他の版画・木版刷の書物

等に用いる刷毛（色判）であるが、これは使う時にも刷毛で（する）と云い、また事実、印刷なので（刷）の字を用いる事は最も当てはまつていようである。

木版刷りは千二百年も前から始められていたのであるが、木版印刷が最も盛大であつたろうといわれる錦絵の全盛時代が、明和・安永・天明・寛政の頃といわれているが、それよりはるかに以前から刷毛と書かれていたものようである。

髮結（かみゆい）が営業として出来たのが、文栄年間（鎌倉時代）といわれているが、江戸時代には男の髻の先を（刷毛先）と呼ばれていたやうで、明和七年刊の洒落本（遊子方言）に

「かみさん、はげさがそけはせぬか見て下んせ」

とある。このはげさは刷毛から出た呼名であるといわれている。

徳川時代の文化の頃に流行した男の髪の結び方の名に、たばね（束）というのがある。このたばねは、油を少しもつけず、水髪に結び、たばをふつくらと出し、刷毛先をばらりと散らして髻の一を、上の方へそらして結ぶのであるが、このたばねの名が刮毛くわつぽうとつながりがあるように思われる。

また歌舞伎劇

（助六由縁江戸桜）

で花川戸助六の台詞に

「江戸紫の鉢巻に、髪は生締め、ソーれや、刷毛先の間から覗いてみる、安房上総が、浮絵のやうに見える
わ・・・

とある。

この時代の男髷の一種に本田というのがあり、その語原は本田某が結い初めた髷の形から出たものとか、此の本田髷に多くの形式があつて、兄様本田、金魚本田、丸髷本田、食附本田、五分下げ本田、豆本田、蔵前本田、団七本田、などがあり、これら本田は通人ぶつた髷に結つたものを云つたのであるという。

古川柳に

ぜぜのない本田が来たと遺手云い

三味線に合はせ本田をふり廻し

などがある。

助六の根を高くした本田髷の広いはけ先の間から遠い安房上総も間近く見せるというので、だてな江戸ッ子の誇りをあらわした文句であるとか。

これは歌舞伎十八番の一つで二代目団十郎が山村座で始めて上演したもので、その時が正徳三年とあるので、当時つくられた台詞げりごが、そのまま伝えられているとすれば、正徳時代以前から刷毛の呼名も、文字も存在した事を立証する訳である。

尤も今から二百七十年程前、刷毛をつくるものを刷毛師或は刷毛匠と呼ばれておつた事が書残されているのである。

更に古くは藤原時代約九百余年前

栄華物語（赤染衛門）に

.....むら刷毛化粧して.....

とあつて白粉についてであるが刷毛の文字のあつた事が知られる。按ずるに刷毛の材料の毛は(きびの毛)(麻)(わらみご)(株栲の毛)などから(獣毛)(人毛)が使われる様になつたものと思われ、刷毛の文字も(いたづり)(刮毛)(波太気)(波介)(波毛)等より(刷毛)となつたもので、この刷毛の文字の使われるようになったのは藤原時代以前からであろうと推定されるのである。

現在の呼名は板を割つて毛をはさみ針金又は糸で綴じたもの、或は、金具で巻いて鋏で締めたもので、主としてものを塗るのに用いるものが刷毛と呼ばれており、それ以外の木、その他の台に孔を明け、その孔に毛を植えたもので用途は主として払う・洗う・磨くという様な回に使用されるものをブラシと呼称されている。

ブラシと云う言葉は正しく言へば(ブラッシュ)となるので、これは外国語。わが国では明治になつてからこの呼称が移入されたと思われているようであり、それが書物にも書かれているが、古くから刷子きざしの呼名はあつたものようである。

荻生徂徠著(訳文筌蹄)に

(刷)コソゲトルコトナリ、ソレヨリ転ジテハラフトヨム。刷子はハケノコトナリ

とあり、この書は初編六巻が正徳乙未歳正月吉日洛東知恩院門前、沢田吉左衛門の刊行にかかり、後編三巻は寛政丙辰歳九月吉日大阪心齋橋敦賀屋九兵衛、洛東知恩院門前沢田吉左衛門両氏の刊行にかかれるものなりとある。

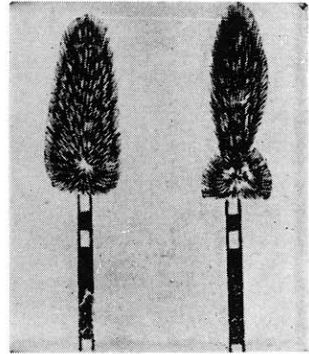
これはこの時代にブラシの呼称のあつた証左であるが、当時既にブラシ類似の毛植付技術がかなり発達していた



助六の本田髷



江戸の町人(はけさき)一安政見聞誌より



毛 櫛

事実もある。

室町時代の能面の髭の植付け、また武士の大刀打や槍合せの場合、身を守るために発明された兜の小具足の顔にあてる（頬当）に毛を植付ける技術は織田、豊臣時代からあつたのであり、徳川三代將軍家光が参勤交代の制を布いたが、これは政治上の意味より定められたのであるが、道中往來の結果、交通上に大影響を及ぼし、道路の修築等大いに見るべきものがあり、中央の文化が地方に伝えられ、我国の発達と密接な關係となつたのであるが、各大名が、江戸へ出府する際、行列美々しく威容を整え、長途の旅を行つた。その行列に持ち歩く槍の穂先を保護するため思い思いの鞘をはめて持ち歩いたが、この鞘が直徑四―五寸長さ三―四尺もあり、鞘の周囲一面に動物の毛或は染めた株柶の毛を植付けたものがあり、この鞘をはめた槍を毛槍と呼び、各大名中伊達、毛利、蜂須賀、浅野、鍋島家などは特に見事な毛槍を用いておつた。この鞘が四ツ目或は千鳥の目盛りにより、一分五厘二分位の孔を一面にあげ、これに漆、或は松脂にて植毛し、見事に刈込んであるものがある。その見事な出来栄を以てすれば、其の時代に紡績用のロールブラシなどの需要があれば、完全なものを作り得る緻密な技術をそなえていた事を、これら遺品が物語っている。

また業者が現今でも呼称する「くしはらい」は、昔、髪を結つておつた時代に、髪を梳る櫛を掃除する具もと云い伝えられているようであるが、三才図会にくしはらいの記載がみられ、それによれば齒ブラシの事のようにである。

くしはらい

俗云久之波良比

梳くし

帚はらい

才三凶会云梳帚ハ以骨為ツツ體リ以毛物コ粧ウ其首ヲ
以去サハ齒ノ垢ヲ刮コソゲ以去レ齒ノ垢ヲ而垢則去ル

按所謂骨者

鹿角象牙之類

とあり、三才凶会は今から二百数十年前の書である。

わが国では外人との接衝の時を除きブラシと刷毛は区別して呼ばれている。我国でも刷毛という呼名をやめて全部をブラシと呼んでも格別不便もない様にも思われるが、ブラシは機械化生産がすすめられ、機械も益々進歩し、機械に依つて生産できる条件にあり、しかも、次々に新製品が獨創的に作成されており、更に海外品の影響もあつて、その製品には近代性が見られるのに対して、刷毛は歴史も古くその形も製法もあく迄も伝統的、古典的な一定の範型を保つて居ると思われる点は誠に興味あるところであるが、やがて各種刷毛の輸出が飛躍的發展を示すならば、将来は其の呼名も総括してブラシと呼ばれる時が、或いは来るのではあるまいか。その是非は兎に角、そんな事も想像されるのである。